津島分校人権だより　　津島分校人権委員会

ひゅーまんらいつ（Human Rights）とは「人権」を意味する言葉です

ひゅーまんらいつ

令和３年度　第２号

ハンセン病について知ろう！

みなさんと同じ人間なのに、普通に生活を送ることができない人たちがいます。
それは、ハンセン病を患っていた方たちです。ハンセン病回復者の方々は、国の政策によって、長い間多くの偏見と差別に苦しんできました。今まで誤って伝えられてきたハンセン病ですが、実態が、ようやく正しく伝えられるようになりました。

私たちにできること…それは、ハンセン病について、正しい知識と理解を持つことです。これが差別や偏見をなくす第一歩となります。今回の人権デーは、ハンセン病を正しく知るきっかけとし、学校や家庭でも話し合い、さらに理解を深めていきましょう。

【ハンセン病とは？】
らい菌による極めて感染力の弱い慢性の感染症。感染しても発病することはまれであり、1943 年（昭和 18 年）特効薬「プロミン」が開発され、完治する病気になりました。しかし、重症者は末梢神経が冒されるため知覚まひや運動まひが起き、脱毛、顔や手足の変形、失明などの後遺症が強く残るため、病気が治っていないと誤解されたのです。　「人間の輪」の 34 ページ

ハンセン病は、昔は、らい病と言われていました。

ハンセン病の歴史は古く「日本書紀」や「今昔物語集」にも「らい」の記述があるといわれています。この病気にかかった人は、仕事ができなくなり、商家の奥座敷や、農家の離れ小屋で、ひっそりと世の中から隠れて暮らしたのです。ある人は家族への迷惑を心配し、放浪の旅に出る、いわゆる「放浪癩」（ほうろうらい）と呼ばれる人がたくさんいました。

明治になり、諸外国から文明国として患者を放置しているとの非難を浴びると、政府は 1907 年（明治 40 年）、「癩（らい）予防に関する件」という法律を制定し、「放浪癩」（ほうろうらい）の患者を療養所に入所させ、一般社会から隔離してしまいました。この法律は患者救済を図ろうとするものでしたが、実際にはハンセン病は伝染力が強いという間違った考えが広まり、偏見を大きくしたと言われています。

1929 年（昭和 4 年）には、各県が競ってハンセン病患者を見つけだし、強制的に療養所に入所させるという「無らい県運動」が全国的に進められました。さらに、1931 年（昭和 6 年）には従来の法律を改正して「癩（らい）予防法」を成立させ、強制隔離によるハンセン病絶滅政策という考えのもと、在宅の患者も療養所へ強制的に入所させるようにしました。こうして全国に国立療養所を配置し、全ての患者を入所させる体制が作られました。ハンセン病患者が乗り越えられない社会との壁を国が作ってしまったのです。

1996 年（平成 8 年）ようやく「らい予防法」が廃止されましたが、国の間違った政策によって、親や兄弟姉妹と一緒に暮らすことができない、自由に故郷に帰る、または家族や親族に対する差別を恐れて、故郷を明かすことができない、実名を名乗ることができない、結婚しても子どもを持つことができない、死んでも故郷の墓に埋葬してもらうことができないなどの苦しみが長く続いたのです。

厚生労働省ＨＰハンセン病について知ろうより

私たちも陽のあたる社会で生きたい　ハンセン病回復者の願い

小説「あん」

著者　ドリアン助川　2013 年 2 月発行（第 25 回読書感想画中央コンクール指定図書作品）
2015 年映画化　監督・脚本　河瀬直美　　主演　樹木希林、永瀬正敏　他

季節は春。桜の咲き乱れる公園に面したどら焼き屋『どら春』で、辛い過去を背負う千太郎（せんたろう）は雇われ店長を続け、日々どら焼きを焼いていた。ある日この店を徳江（とくえ）という手の不自由な老婆が訪れ、バイトに雇ってくれと千太郎に懇願する。彼女をいい加減にあしらい帰らせた千太郎だったが、手渡された手作りのあんを舐めた彼はその味の良さに驚く。徳江は 50 年あんを愛情をこめて煮込み続けた女性だったのだ。店の常連である中学生ワカナの薦めもあり、千太郎は徳江を雇うことにした。徳江のあんを使ったどら焼きのうまさは評判になり、やがて大勢の客が店に詰めかけるようになる。

だが、店のオーナーは徳江がかつてハンセン病であったとの噂を聞きつけ、千太郎に解雇しろと詰め寄る。そしてその噂が広まったためか客足はピタリと途絶え、それを察した徳江は店を辞めた。素材を愛した尊敬すべきあん職人である徳江を追い込んだ自分に憤り、酒におぼれる千太郎。ワカナは彼を誘い、ハンセン病回復者の住む療養所に向かう。そこにいた徳江は、淡々と「自分も自由に生きたかった」と思いを語るのだった。　（映画「あん」Wikipedia より）

**「こちらに非はないつもりで生きていても、
世間の無理解に押しつぶされてしまうことがあります。
そうしたことも伝えるべきでした。
（映画の中で吉井徳江（よしいとくえ）さんから千太郎にあてた手紙の言葉）**

映画「あん」で徳江役を演じた樹木希林さんが語るこのセリフは、私たちの胸に鋭く突き刺さります。ただ「人として自由に生きたかった」だけ…この思いは、かつて、無知からなる差別や偏見によって奪い去られてしまったのです。2021 年５月現在、国内の国立ハンセン病療養所の入所者は 1001 人（平均年齢 87 歳）となったそうです。一部で社会復帰が進みましたが、多くは今も療養所に残っています。高齢であることや、視覚や四肢の後遺症などが主な理由ですが、社会の差別や偏見を恐れる人も少なくなかったそうです。断種や妊娠中絶を強いられたため家族がおらず、「住み慣れた施設で暮らしたい」と願う人も多いそうです。今、生きている方々だけでなく、既に亡くなられた多くのハンセン病回復者の方々がおられるということを私たちが知ることにより、さらに、偏見のない世の中にしていきましょう。　読売新聞記事より

本校のアンネのバラ

感染症に対する無知は偏見へとつながっていきます。コロナ禍において感染した患者に対するバッシングやいじめが問題になっています。私たち一人ひとりの差別をなくしていこうとする行動が、人権が守られた社会づくりへとつながっていくのです。

☆感想を書きましょう!!

（　　）年（　　）組（　　）番　氏名（　　）